

観望の原点回帰？それとも脳の老化順応？

仙台駐在員 小野寺

天文を趣味にして、本格的に活動（観望、特に眼視観望）をし始めたのは、多分 1995,6 年頃だと思います。神戸に引っ越してきて、ちょっと落ち着いた頃からでしょうか。ニフティサーブの会議室で、桑田さんたちと知りあったのもその頃だったと思います。当時は、暗い空が近くにあるということで、宮内の 10 センチ対空双眼鏡や Ninja320 を購入し、いわゆる「大口径病」に感染していました。確かに大口径はすごく良く見えます。馬頭星雲も、3C273 も、ステファンの五つ子も Ninja で楽しめました。その後、横須賀、仙台と引っ越すにつれ、暗い空は遠く遠征意欲は低くなり、やがて変光星観測へと興味がシフトしました。変光星なら、敢えて暗い空でなくても観測が可能ですし、忙しい合間でも 10 分程度の時間と夜空があれば、双眼鏡で星に接することが出来るだけでなく、ついでにメジャーな星雲、星団観望も出来るからです。

40 年以上も天文を趣味としていると、大口径病に感染したり、その昔は銀塩写真にのめり込んだりしたのですが、最近は観望の楽しさって、空の暗さや機材の性能だけではないと実感しました。もちろん、暗い空、性能の良い機材があれば、星空を観望する楽しさは大きいものですが、光害の多い市街地での生活がメインで、忙しくて遠征に出かける時間がなくても、4,5 センチの双眼鏡で星空は楽しめます。実際、8 センチのフィールドスコープでもかなり観望を楽しめています（2021 年 1 月会報）。それどころか、自作の 6 センチの短焦点アクロマート屈折（下の写真、倍率 15 倍、実視界約 4.6 度の正立像です）での観望ですら、楽しめる事を実感しています。もちろん、オリオン星雲などは、わずかに星雲らしさが感じられる程度だし、たて座の M11 は白い光芒にちょっと星が見える程度、いて座の M8 などは、星雲の面影はほとんどなくて、中の明るい星が固まっているのがぼんやりとわかる程度なのですが、でも、見える事の感動は、不思議ですが同じなのです。街中でも「おっ見えるね～」と感動するのです。特にフィールドスコープが意外に観望に使える事がわかってからは、新しい星の楽しみ方を見つけたような気がしています。



そう感じるのは、自分が高齢になり、目の能力の衰えを実感しているからなのかも知れません。体力の衰えなども考慮した星の楽しみ方を、自然と身体（と脳？）がを見つけ出しているのでしょうか？市街地で双眼鏡の視野に見える数個の星。でも見るとなぜかホッとするので。もちろん、暗い空の下で、存分に星を楽しみたい気持ちは健在です。昼間でも良いので、「森の宇宙船」をぜひ一度元気なうちに見学に行きたいものですね。